

コトタマ学の詳細に入ります。

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

母音・半母音 1

その 201

言霊ウ 天の御中主の神

心の内に 具体的な事柄として、言葉で表現される以前の意識されない頭脳内の、先天の構造の中のお話であることを心に留めておきください。何も無い広い心の宇宙の中に 何かが動き出します。何かは分からないけれど 広い宇宙の 1 点に動き出したもの そしてやがては 私 という意識に発展して行く最も原始的な意識の姿です。

宇宙の中に初めて意識が働きだす 1 点、それはよくよく考えますとその動き出す瞬間が、今であり此所であるということです。心の息吹が芽を吹き燃え出そうとする瞬間こそ、現実の今であり此所であるということが出来るでしょう。これ以外に今という時と此所というところはありません。私たちの心の活動はいつでもこの今此所から出発しています。人間万事すべての活動が始まる出発点です。

その 202 に続く

島田正路氏著「コトタマ学」より抜粋

母音・半母音 2

その 202

意識の働き出す一点 今・此所「中今」の補足説明

さて知識から実践へ進むにはどうしたらよいのか。言霊というものがある、ということから出発して、言霊の原理を 自らの心全体でとらえ、その原理によって自らを見つめ、社会を見、人類文明の創造に寄与するためにはどうしたら良いのか。知識から実践への道はいかに。言霊についての知識を身につけることと、生きた言霊、自分自身を一瞬の休みもなく導いてくれている言霊に現実接することは全く違うことです。

糸も平々凡々たる人間が一瞬の休みもなく、言霊に触れ、言霊によって生きているところ と時は何時・何処か。言霊学を知っている人も、全く知らない人も、生きている間、常に言霊によって生きている時と場所は いずれか。

言霊が常に生きて活動しているところ、それは私たちが生命を燃焼し、現実に自らの生活や社会や人類文明を創造しつつあるところであり、古神道はこれを中今と呼ぶ、中今とは、常になる此所・今のことである。言霊 50 音とは、この今・此所即ち中今の内容である。生きた言霊に接している自覚を持ちたいならば、言霊が活動している地点、中今に帰ればよい。方法は人ただ一つこれだけである。

人は常にこの中今に於いて生きている。常にそこに生きていながら、それを自覚する人は少ない。

中今を自覚する次元を言霊アという。その中今の内容である言霊が活動して生活を文明を創造して行く次元を言霊工という。50 音言霊の原理は「今・此所において物事に対処して何かをしようとする瞬間」すなわち実践智の働く瞬間において操作することができるものなのである。古事記百神の総括論で

ある三貴神（みはしらのうづみこ）天照大神・月読の命・建須佐男の命・の誕生に際して父の伊耶那岐の命が天照大神（言霊工）にのみ御頸珠（言霊原理）を授け、他の二神には許可することがなかった所以である。言霊原理は言霊工の実践智においてのみ操作が活用が可能なのである。

その 203 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

母音・半母音 3

その 203

言霊ア、ワ ^{たかみむすび}高御産霊の神・次^{かみむすび}に神産巢日の神

補足説明 ア・ワ がなければ現象化は起こりません。世の創造活動はアとワがあるから可能なのです。

本文

広い心の宇宙に何か動き出しました。言霊ウです。次に 先天の頭脳構造に何か起きるのでしょうか。

心の宇宙の中に、言霊が生まれ、次に宇宙は主体と客体、見るものと見られるもの、私と貴方に別れることとなります。見る主体を言霊ア、みられる客体を言霊ワと言います。古事記の編纂者は、それら言霊の意義内容を指す指月の指として、高御産霊の神 神産巢日の神という、神名を当てたのでした。

心の宇宙からウが生まれ、次に言霊アとワに分かれた、と言いましても、これらはまだ意識の自覚に至

る以前の、先天構造の内部のことでもありますから、見ている側が 何の誰米とか、見られる客体が何々のものとか、という具体的なことではありません。あくまで先天脳構造についてお話しているのだ、ということをご承知ください。この何もない宇宙から言霊ウ、ア、ワと分かれてくる状態を図で示しますと、下の図のようになります。

言霊アとワについて、太安万侶が、高御産霊の神、神産巢日の神という名を挙げた意図は何だったのでしょうか。両方の神名をカタカナで書いてみましょう。タカミムスビノカミ、カミムスビノカミと、なります両方比べてみますと、漢字で書いた時には気がつかないのですが、主体を現わす高御産霊の神の方の頭にタの一字が多い、という他は全く同じであることに気づくでしょう。

先ずそのタの一字を除いた、神産巢日の神について考えてみましょう。カミムスビノカミは噛むの意味です。噛み合わさることです。ムスは生まれる・はえる・生じるという意、ビは霊で 言霊特に子音のことです。むしてできた子を息子（むすこ）といいます。カミムスビノカミ全部では「噛み合わさって現象である子音を生じる」となります。噛み合わせることを現代語では感応同交といいます。主体と客体がお互いに感応同交して現象が生まれる、ということです。男と女が感応同交すれば子ができます。そのお互いに噛み合わさるもの、それは主体と客体であり、我と汝であり、また男と女、 出発点と目的点、積極と消極等と色々なことに当てはまります。

宇宙からまず一者が生まれ、それが二者に別れ、それぞれに ウ、ア、ワ と名がつけられました。生まれてくると同時に、それに名がつくこと、これが人間の創造の始まりです。名がつかなければ何も始ま

らないのと同じです。これも人間の心の営みの大原則でということができましよう。

その 204 につづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

母音・半母音 4

言霊ヲ、オ うましあしかびひこぢ 宇摩志阿斯訶備比古遲の神、あまとこたち 天の常立の神

その 204

宇摩志は霊妙な意、阿斯訶備比古遲の阿斯訶備は葦の芽、比古遲とは男のこと、男は男の子で言葉を意味する。全部で霊妙な葦の芽のように次から次へと萌え出てくる言葉の実体、ということになります。心の中で次々に吹き出るように、現れるもの、といえはそれはすぐに人間の記憶であることがお分かりのことでしょう。宇摩志阿斯訶備比古遲の神とは、人間の記憶、経験した出来事の記憶であります。その記憶はただ 1 つポツンとあるものではなく、他の記憶と連動して次々と果てしなく関係が広がります。この経験の記憶が存在する宇宙のことを言霊ヲといいます。そのヲに漢字を当てはめると尾・緒などが考えられるでしょう。天の常立の神とは、大自然の（天）が恒常に（常）成立する（立）主体、といった意味であります。阿斯訶備比古遲が記憶そのものの世界、言霊ヲとすれば、天の常立の神とは記憶しその記憶それぞれの関連を考える、主体の世界、言霊オということができましよう。記憶とその関連を考える世界といえは、そこからやがて学問が成立してくる世界であります。それはまた

「自然界とは何か」の思考を成立させる、心の世界のことでありましょう。

補足説明

言霊オの世界はアとワに分かれた後現われ出てくる世界です。つまり、この世界は対象となる物が既にありきの世界です。これから「考える」という概念が働きます。学問・科学の世界です。

つまり伊耶那美の世界・黄泉の国・須佐男の命の世界・生存競争・弱肉強食の世界が展開します。物質科学文明が発展します。

その 205 に続く

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

母音・半母音 5

その 205

言霊工、工 くに とこたち 国の常立の神 とよくもの 豊雲野の神

国の常立の神とは国家が（国）が恒常に（常）に成立する（立）ための実体（神）という意味です。この実体が言霊工です。この宇宙の広がりから現れてくる人間の働きは実践智です。こと名前に漢字を当てはめると選ぶの字が最も適当でしょう。言霊工に「選ぶ」を当てはまるのがなぜ良いか、もう少し詳しく説明することにしましょう。

広く何も無い宇宙の中に意識の芽と言われる言霊ウが生まれます。まだ主客未剖でなにかあるが、そ

れが何であるかわからない状態です。言霊ウは五官感覚作用が現れてくる世界です。

その次にそのなんだかわからないものに人間の「何かな」という思考が加わった瞬間、言霊ウの宇宙は別れて主体アと客体ワの宇宙となります。言霊アの宇宙から、現れる人間性能は感情（光の）です。

「何かな」の思考の次に人はそれを今までに経験した過去の出来事の中に求めようとします。記憶と結びつけようとします。言霊オとワの経験値の世界が生まれます。

そしてその何かがわかったら、人間は次にそれをどう扱うか、の選択に迫られます。言霊工（工）が現れます。言霊工（工）とは人間の選択する知恵即ち実践智が現れてくる宇宙のことなのです。言霊工「に選ぶ」の字が適当だとお話した理由です。

豊雲野の神の「豊」は十四は数が示す謎です。解説は後章に譲りますが、十四は先天構造を構成している言霊の基本数なのです。豊の葦原の瑞穂の国の豊も同じ意味であります。雲は組むという言葉を示す謎です。「野」は分野というの意味です。豊雲野の神で先天構造の言霊をどのように組んでいくか、を考える分野の主体といった意味にとれます。これは実践智によって、表わされた道理とか道徳とかと言う意味となりましょう。言霊工に当たる漢字を拾いますと慧・絵が考えられます。

ある物事を見て、見る主体と見られる客体が別れたところより思考が始まる時、言い換えますとある出来事を見て、それを頭の中に思い浮かべて、「これは何故かな」と思考が始まる時、学問的知恵、言霊オの世界の働きが現れます。これとは別に、「何、何故」の思考を傍らにおいて、思考の初めである宇

宙の初発に帰り、「さて私はどうしようかな」と思う時、実践智である言霊工からの知恵が働き出す、と言うことになります。

補足説明

言霊アの心で言霊工の実践智が働くことがポイントです。

その 205 に続く



